

スピーキング指導のための基礎研究 — Communication Strategy の意義 —

広島大学大学院

柳 井 智 彦

1. はじめに

本稿はスピーキングの指導に関して、学習者の「言語運用」に伴う問題点を考察することを目的とする。学習者の言語はエラーアナリシスの研究分野であるが、それが従来、言語能力（文法知識）の習得プロセスに大きな関心を示してきているのに対し、本稿では言語運用に焦点を当てて、'communication strategy' という概念を中心に論ずる。さらに、'pidginization' とよばれるプロセスを関連事項として考察する。おわりにはスピーキング指導のあり方について私見を述べてみたい。

2. Learning Strategy と Communication Strategy

エラーアナリシスは学習者の言語に現われる誤りの意義を認めてきたのであるが、研究の主要テーマは、学習の際の誤りについて、それが生ずる要因を解明することにあつたであろう。一般に、学習者は学習の際にいろいろなストラテジーを用いて独自の文法体系を形成していくと考えられている。そのストラテジーとは、言語の転移、過度の一般化などであり、今日も研究者の論議が盛んである。しかし本稿では視点をやや異なった種類のストラテジーに移してみたい。それは Communication Strategy (以下、CS と略す) とよばれるものである。この用語については、Selinker (④: 217) は 'strategy of second language communication' とよび、また、Richards and Kennedy (①: 19) によると、Tarone *et al.* (⑥) は 'production strategy' とよんでおり、研究者によって用語の意味に微妙な違いはあるようである。本稿では、'Learning Strategy' (以下、LS と略す) と対比させて次のように規定しておく。すなわち CS とは「実際のコミュニケーションにおいて、意志疎通を目指すために用いられるストラテジー」であり、LS とは「学習において、学習者の言語体系を生み出させるストラテジー」であると考えておく。このような2分法を用いたのは、現実に意志伝達をすることと、学習によって文法の知識を得ることとは異なる活動であると考えからである。経験的にも知られているように、文型練習の時にはすらすらと言っていた文も、いざ会話になるとうまくは言えず、かろうじて通ずるような文を作ってしまうことがよく起こる。LS は competence や usage にかかわり、CS は performance や use にかかわるものであるともいえよう。

具体的に CS がどのようなものであるかは、Richards and Kennedy (①: 21-23) にいくらか例が示されている。彼らは 'production strategy' という用語を用いているが、まず、'language transfer' が学習よりもむしろ発表の際に顕著であるという。次に 'simplification' をあげ、語形変化のように意味の伝達にそれほど重要でない部分は消去されるとする。また、'extention' とは、難しい単語の代わりにより広い意味をもつ基本語を用いることを指す、と述べている。他に、'paraphrase'、'avoidance' などが挙げられているが詳しくは原論文を参照されたい。ここでは、私が日本人の英会話を観察して気付いたことを2つ、例としてあげたい。たとえば、英語の知識の学習は一応終了したと考えられる大学生が外人に、'Does your father have a camera?' という Yes/No

疑問文で質問されたとすると、予想される答の典型は 'Yes.' などのいわゆる laconic answer である。もちろん、あとに 'It's old.' というような説明を加える者もいるであろうが、学校で学んできたような 'Yes, he does.' 式の short answer で答えることは稀である。この現象は、会話というスピードを伴うコミュニケーションにおいては 'Yes' のみの方が 'he does' の部分をまちはえる心配がなく、しかも十分意味を伝達できるという便利さから学習者が用いる、一種の CS であると解釈できないであろうか。^(注) また、中学校3年で学ぶ構文に 'I was so busy that I could not see him.' があるが、同様の意味を伝えるのに、日本人によってより多く使われるであろうと予想される表現は 'I was very busy, so I could not see him.' である。私の観察では、接続詞 'so' は日本人に好んで用いられるものであり、2番目の言い方はスピーキングではより運用しやすい表現であるといえよう。運用しやすい方を選ぶ、ということは CS の中核になっているのではないかと考える。

ここで前述の 'Yes' の問題に戻り、研究への示唆を考えたい。同じ 'Does your father have a camera?' という質問を中学生に尋ね、もし 'Yes, it is.' という誤った答が返ってきたとすると、一般にエラーアナリシスでは 'it is' の使用について、その誤りの原因、矯正の仕方などが論じられるであろう。しかし、CS の研究からは、初級段階ではむしろ 'he does' を省略した 'Yes' のみの答え方でよいのであり、実際にはそれほど重要ではなく消去される場合の多い 'he does' の部分は、以後の学習においても強調する必要はないのではないか、という提案ができるであろう。もちろん教育的配慮等の問題もあり、極論ではあるかもしれない。しかし、言語運用の実態を客観的に観察し、CS を抽出していくことは、現実的な到達目標を示すうえからも、また言語運用に grading を設けようとする場合にも重要になるのではないかと考える。

3. CS と pidginization

CS を研究する方法としては、当然のことながら、学習者による実際のコミュニケーションを観察、分析することが必要となり、私は現在、具体的データを収集している。分析が完了していないので具体例を出すことは控えるが、英語の知識は十分もっている学習者でも、スピーキングになると冠詞、数、時制などの初歩的誤りを多くおかしている。しかし、これらの誤りは学習者自身も気付いており、後で自ら訂正できるような誤りである。すなわち、これらは Selinker (④: 215) のいう 'fossilization' (化石化) の起こりやすい誤りであり、それがコミュニケーションの際に再現したものであると考えられる。では、なぜこのような誤りが再現するのであるか。私はその原因の1つが CS にあるのではないかと考える。すなわち、実際のコミュニケーションにおいては最低限の意味の伝達が優先され、冠詞等の redundant な要素が欠落してくるのではないかと思う。ところで、この現象は pidginization (ピジン化) とよばれるプロセスとの類似点が多い。ピジン化の結果生まれる言語が pidgin (ピジン) であるが、ピジンは後述するように、コミュニケーション中心の非常に機能的な言語である。学習者の CS と、ピジン化にも存在すると考えられる CS とを比較検討することは、「コミュニケーションのための英語」の指導を考える際に何らかの示唆を与えると思う。

第2言語学習とピジン化の関連は Schumann (②, ③) が詳しく述べているが、彼はピジン化については Smith (⑤) に大きなヒントを得ている。Smith (⑤: 48-55) は、まず言語の機能を3種類、すなわち、情報の伝達にかかわる 'communicative function'、社会的地位を示す 'integrative function'、そして感情や心理を表わす 'expressive function' に分けている。そしてピジン

(注) 詳しくは本紀要 (No 10, 1980) の拙稿、「日本人による英語会話の談話分析」を参照されたい。

ンの特徴は、第1の communicative function に機能が制限されている点であるとする。そのような1種類の機能しかもたないピジンという言語は、構造的には語順の固定化、語尾変化等の redundancy の減少が起こり、語いは制限され、また受動化等の変形操作を欠いている。そして、ピジンのこのような表層構造はその深層構造との差がきわめて小さいということを指摘している。

以上の諸特徴がピジンを形成していった人々の用いた CS の結果であると考え、ピジン化とは、「Redundancy を減少させ深層意味構造の表出を志向する CS が放任され、communicative function のみの機能をもつ言語が成立していく過程」であると考えられる。第2言語(外国語)学習においては、CS は教師、社会等によって価値判断され、フィードバックされるのが特徴である。

さて、日本のように英語が外国語であって、それを話す機会が少ないという社会状況においては、ピジンの英語が定着するというおそれは少ない。しかし、学習者の言語運用のプロセスにはピジン化との共通性が多く含まれているのである。ある意味では、audio-lingual な方法はピジン化、ブロークン化を極力警戒した方式であるといえよう。外国語学習とピジン化の関連は慎重に考慮していかなければならない問題であるが、コミュニケーションに結びつく英語の指導を考える時、何か本質的な問いが含まれているように思われる。

この問題に関連して、最後に Valdman (⑦) の論を考察する。彼は、外国語学習において文法的に話すこと (well-formedness) と、うまく意図を伝えること (communicative effectiveness) が平行的に発達することは理想的であるが非現実的であるとする。そのため、一般の外国語コースでは後者を犠牲にして文法的正確さを強調しているのが現実である。ところが、文法的正確さを求めることは、何とか意図を伝えようとする試みを阻止するのである。一方では伝達能力が高く評価されながら、他方にこのような現状があるのは 'paradoxical' である、と述べている。そして、西ヨーロッパの移動労働者の言語使用にみられるように、文法的正確さよりも、効率のよい意志伝達を重視する外国語教育の方が、動機づけの面からもより適当なのではないかと提案している。この Valdman の論はピジンの言語を外国語学習において許容するという立場にたつものと思われ、1つの極論を示しているといえるが、換言すれば、言語運用に伴う CS を積極的に評価した論であるともいえよう。

4 スピーキング指導についての一案

以上、CS とピジン化の問題を考察してきたが、最後に「コミュニケーションのための英語」について一案を述べたい。Valdman の意見は示唆するところも多いが、現状では教師、生徒の感情に反する面も少なくない。そこで、次の2点を提案したい。

(1)スピーキングのための 'simplified English' を規定すること。私のいう 'simplified' とは、「文法的であって、かつ平易な」という意味である。具体的には前述した 'Yes' という答え方や 'so' の使用などを指す。これらは音声、語い、文法等にわたって考察されねばならず容易な仕事ではないであろう。しかし、初歩的英語すら話せない現状において、より話し易い英語とは何かという問題は研究されるべき課題ではないであろうか。ただ、留意すべきことは、言語学者の考察する「やさしい」英語が本当に学習者にとってそうであるかは確信のもてないことであり、私は学習者の用いる CS の中にそのヒントを求めていくべきではないかと考える。

(2)英語のうち 'simplify' できない部分(たとえば3単現の 's' など)については、もし誤りをおかせば、(a)訂正すべき致命的誤りとそうでない誤りを区別する、(b)訂正は学習が進むにつれてより厳格にする。これらは、エラーアナリシスの研究者も指摘するところであろうが、特に(b)に

ついて考えると、スピーキングの練習の初期において誤りを指摘されるのは学習者にとって苦痛であり、意欲の減退にもつながりかねないであろう。Community Language Learning (CLL) も示唆するように、学習者は外国語でのコミュニケーションの喜びを第1に知るべきであり、その後、自らがより正しい表現を志向するようになった段階で厳格な訂正を加えていく方が、情意的にもより適切ではないかと思う。しかし、中、高、大のレベルすべてに適した方法か否か、評価はいかにするかなど多くの問題が残り、今後の課題として本稿を終える。

〔参考文献〕

- ① Richards, J.C. and G. Kennedy (1977) "Interlanguage: A review and Preview," *RELCJ*, 8, 1, 13-28.
- ② Schumann, J.H. (1974) "The Implication of Interlanguage, Pidginization and Creolization for the Study of Adult Second Language Acquisition," *TESOL Q*, 8, 2, 145-152.
- ③ _____ (1976) "Second Language Acquisition: The Pidginization Hypothesis," *LL*, 26, 2, 391-408.
- ④ Selinker, L. (1972) "Interlanguage," *IRAL*, 10, 3, 209-231.
- ⑤ Smith, D. (1972) "Some Implications for the Social Status of Pidgin Languages," Smith and Shuy (eds.) (1972) *Sociolinguistics in Cross-Cultural Analysis*, Georgetown University Press, 47-56.
- ⑥ Tarone, E., U.F. Felder and L. Selinker (1976) "Systematicity/Variability and Stability/Instability in Interlanguage Systems," *LL*, Special Issue 4, 93-134. (未見)
- ⑦ Valdman, A. (1979) "On the Relevance of the Pidginization-Creolization Model for Second Language Learning," *Studies in Second Language Acquisition*, 1, 2, 55-75.